

205. *Metaphysics* A1, 993 a 23-30→ α 1, 993 b 23-31 ; p. 208. *Metaphysics* Z6, 103b 11-12→1031 b 11-12 ; p. 216. *Confessions* (vi, 16, 28-9)→(iv, 16, 28-9) ; p. 269. Hadot, P. ('Un fragment...'の掲載頁 (11-27) ; p. 271. Isaac, I. →Isaac, J. ; p. 281. Solmsen, F. ; *Die Entwicklung...*の出版地 ; Sorabji, N. →Sorabji, R. ; p. 282. *Forschungen zur Platonismus*→*Forschungen zum Neuplatonismus* ; p. 283. Vogel, C. J. de ('Boethiana' ...59-66.... →49-66 また野町啓「ギリシア的混合論とクリストロギ一」『中世思想研究』25 (1983) 54頁註(9)に誤りが指摘されている p. 199. *de gen. et corr.* 226A10→327A18 sqq., 328A25)。 (ISBN 0 19 826447X, ￡18)

Iohannis Scotti Eriugena Periphyseon
(*De Divisione Naturae*).

edited by I. P. Sheldon-Williams with the collaboration of
L. Bieler, Liber I—III (Scriptores Latini Hiberniae
VII/K/XI), Dublin, The Dublin Institute for Advanced
Studies, 1968/72/81, pp. x+247, 252, 324.

小田川方子

これは、9世紀のアイルランド哲学者ヨハネス・スコトッス・エリウゲナの主著『ペリピュセオン』（自然について）の一巻から三巻までのラテン語原文とその英訳および註である。第一、二巻は Sheldon-Williams によって刊行されたが、第三巻は彼の没後、残された英訳を含む草稿が O'Meara によって整理されて出版された。第四、五巻の出版もこれに続く予定である。

『ペリピュセオン』は、中世に「汎神論」と断罪され禁書となったため、最初の版はようやく1681年に Gale によって刊行された。これはケンブリッジに現存する12世紀の写本を底本としている。1838年には基本的にこのゲイル版に依った版が Schlüter によって刊行された。今まで最良とされていたのは、次いで1853年に

Floss によって編集され Migne 版の中に収められている版である。Floss はケンブリッジ写本に従いつつも、9世紀のパリの写本によって改良することを試みたが、写本間の不一致は説明できなかった。この度の Sheldon-Williams による版は、エリウゲナと同時代の9世紀の写本に依り、エリウゲナの思想の発展を再現することと、同時に、彼が最終的に満足するに至った原文を提示することを目指している。すなわちこの版は、現存する最古で最も基本的なランスの写本と、その、エリウゲナ自身によってまたは彼の監査のもとでなされた変更および書込みを含むバンベルクの写本と、更にこれが部分的に彼の加筆によって拡大されたパリの写本とを提示している。

この書の書名は、従来『自然の区分について』として知られていたが、編者によると、これはただ第一巻第一章に対する題名であり、全体に対してより適切な『ペリピュセオン』という書名は、後の加筆の段階で現れる。各巻の序文では、内容を分析した紹介があり、本文では、ラテン語原文に英訳が対置され、巻末では豊富な文献を用いた問題史的説明を含む詳しい註が与えられている。

『ペリピュセオン』第一巻冒頭でエリウゲナは、彼が研究しようとしている「自然」*natura* は、存在する一切と、存在しない一切とを包括するものであると定義する。次いで「自然の区分について」四種を挙げ、第一を「創造し、創造されない自然」、第二を「創造されかつ創造する自然」、第三を「創造され、創造しない自然」、第四を「創造もしないし、創造されもしない自然」と呼ぶ。これらに対する説明のうち、第一巻では更に、神は万物の第一原因として一切を創造するのであり、自らは初めをもたないから、「創造し、創造されない自然」*natura quae creat et non creatur* であるとされ、続いて神の「三位一体」*trinitas* についての説明がなされる。神は、存在、知恵、生命、つまり父、子、聖霊よりなる三位一体であり、神の「一性」*unitas* は三つの「実体」*substantia*、つまり、「生み出されない」*ingenita*、「生み出された」*genita*、および「進行しつつある」*procedens* 三つの実体を含み、これらの実体間の関係が父、子、聖霊であるとされる。更に、「肯定神学」*theologia affirmativa*、*καταφατική* と「否定神学」*theologia abnegativa*、*ἀποφατική* とについての説明がなされ、両者はすべての述語に *plus quam* (……より以上のもの) という接頭辞を附加することにより調停させられる。最後に付録として十のカ

テゴリーの解明がなされる。

第二巻では、自然の第二の区分、つまり「創造し、かつ創造される自然」*natura quae et creat et creatur* が扱われるはずであるが、まず自然の四つの区分について、および性の区別と復活後の身体において無性たることについて述べられる。次に主題に入り、創世記冒頭の言葉「初めに神は天と地とを創造された」が引用され、天の創造は、父たる神が神の子において創造したところの全被造物の「原初的諸原因」*primordiales causae* に、また地の創造は、これら諸原因の諸結果に関係づけられる。つまり、原初的諸原因は、神によって創られ、自らはそれらより下の諸物を創るので、自然の第二の区分にほかならない。ここで原初的諸原因についての考察は中断され、一切の最初にして最高の原因であるところの三位一体論の究明に移行する。そこでは子と聖霊について、三位一体と人間の本性および魂との関係について、魂と身体との関係についてなどが述べられる。最後に、本来の主題たる原初的諸原因についての考察が再開されるが、これはごく僅かで終わっている。

第三巻は、自然の第三の区分、「創造され、創造しない自然」*natura quae creatur et non creat* に当てられるはずであるが、その前に前巻に引き続いて原初的諸原因についての詳細な議論がなされる。原初的諸原因は無限に多くあるが、エリウゲナは善、存在、生命、理性等の最初の十を考察する。これら諸原因は、他の一切の原初的諸原因と同様、本性において一つであり、その中の何かが他に勝るということはない。このことに対して円の比喻による説明がなされる。すなわち、円の中心から円周に至る多くの線は、そこからそれらが由来する中心において一つであるが、円周において無限に多数なものとして現れるのである。また善を第一とし、存在、生命等と続く原初的諸原因の順序は、これら諸原因自身によって決定されるのではなく、実は諸原因の働きの諸結果——第三の「自然」がこれにあたるが——によって観照するところの「精神」*mens* が決定するのである。諸結果は諸原因に関与するが、関与の仕方が異なるので、それによって諸原因の順序の精神による選択がなされる。すなわち、善には存在よりもより多くの関与が、存在には生命より多くの、また生命には理性より多くの関与がある。従って次に、関与によって何が意味されるか吟味される。

「関与」*participatio* はギリシア語の *μετοχή* ないし *μετουσίαια* によって、ラテ

ン語によるよりもよりよく表現される。なぜなら、エリウゲナが「の後に」の意味に解する接頭辞 *μετα* は、関与するものは関与されるものに対して第二位的なものであり、関与とは後者から前者への進行であることを示すからである。関与されるものと関与するものは、泉とそこから流れ出る水のように相互に関係している。水はそこからそれが流れ出るところの泉と本質的に一つである。したがって、泉は隠れており、水は可視的であるが故に、水は泉の現れであり、「神の顕現」*theophania* である。

ここでエリウゲナは、偽ディオニシウスに言及しつつ、すべての叡智的なものと感覚的なものはそれ故神の顕現である、すなわちそれ自身においては見えないところのものの叡智的ないし感覚的な現象であるという。このことは、知性とそれの自己表現の手段という類例によって説明される。しかしこの類例は適切とはいえない。なぜなら知性はそれ自身にとって外部的な素材においてそれ自身を表現するが、神はそこにおいて自己自身を表現できるものを外部にもたず、無から創造するからである。これは次の主題に通ずる。

無についての研究は、第三巻の主要な部分を占め、それによって自然の第三の区分たる万物の本質が究明されるが、まず「無からの創造」*creatio de nihilo* という表現によって、無は万物の絶対的欠如を意味するのか、または神的超実在を意味するのかが問われる。エリウゲナの結論は、そこから万物が創造されたところの無は、ただ神的超実在であるということである。「神は無から一切を創造する、すなわち彼は彼の超存在性から存在を出現させる……存在し存在せぬところの一切のものの否定（＝無）から、存在し存在せぬところの一切のものの肯定を（出現させる）」(683 B)。被造物は神に由来し、神は原因であり、被造物はその結果である。だが結果は、結果された、ないし創られた原因である。ここから、自然の第三の区分たる被造物は、動因ないし自然の第一の区分と同一視される。最後にこれとの関連で、『創世紀』の詳細な註釈がなされる。

以上のような内容をもつ『ペリピュセオン』第一、二、三巻は、新プラトンのキリスト教的伝統に根差しつつ形成されたエリウゲナの思想の独自性と、彼の近代哲学をも先取する合理的精神を鮮明に印象づける。本書の出版は、最近ようやく本格化したエリウゲナ研究にとって、画期的な意義をもつものと思われる。